

福永武彦

岩波書店

Fukunaga

二十世紀小說論

二十世紀小説論

福永武彦

岩波書店

二十世紀小説論

一九八四年一月三〇日 第一刷発行 ©

定価二四〇〇円

著者 福永武彦

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・六五・四二二
振替 東京六二六二四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-001646-6

目

次

I

一 アンドレ・ジイド序論

1	一九一三年	4
2	古いロマン	11
3	初期のアンドレ・ジイド	20
4	レシ作家としてのアンドレ・ジイド	27
5	『法王庁の抜穴』	41

二 マルセル・ブルースト序論

1	一九一三年に於ける世代	54
2	ブルースト略年表	61
3	ブルースト長篇の原型	64
4	ブルーストに於ける象徴主義	70
a	序論	
b	Hyperbole	
c	時間	
d	ヴィジョン	
e	睡眠と夢	

三 二十世紀小説の時間的構造

序 論

1	小説の時間的特徴	102
2	小説の分類	106
3	外面的時間	111
4	十九世紀小説の完成	116
5	時間への反逆	119
6	心理と意識	123
7	意識構造の図式	130
8	時間の方法	132
9	内面的時間	141
1	小説家の意識と作中人物の意識	148

本 論

a	小説の分類	b	小説家の小説に於ける位置
c	小説家のモチーフ	d	小説家の無意識
e	小説家の内部世界	f	作中人物の意識

II

A	小説とは何か	184
B	簡単な定義	188
C	一般的な分類	191
D	私の分類	192
E	現実(<i>le réel, la réalité, l'actualité</i>)	197
F	自然・世界・現実	202
G	素材としての世界	209
H	渾沌としての世界	213
I	小世界(<i>conte et nouvelle</i> に於ける)	217
J	小世界(<i>roman</i> に於ける)	221
K	小世界(登場人物)	226
L	全体小説	231
M	純粹小説	234

二十世紀小説論講義草案

1 小説とは何か——十九世紀からProustまで

十九世紀以前の小説……………300

Balzac 人間喜劇序説……………296

Zola 実験小説論……………292

Maupassant の小説論……………288

小説の工業化……………277

象徴主義……………275

Gide の Walter へ Valéry の Teste……………272

Proust……………267

2 二十世紀小説の本質的研究

時 間……………262

(1) 無時間 (2) 物理的時間 (3) 自然的時間……………41

(4) 超自然的時間 (5) 歴史的時間 (6) 内面的時間

(7) 根源的時間

十九世紀以前の小説に於ける時間……………253

50

二十世紀小説に於ける時間	246
方 法	244
(1) 定義不能	59
(2) 他の藝術との関係	57
(3) 読者の自由	
(4) 小説の自由	
(5) 発展	
(6) 筋	
(7) 運命	
(8) 小説家は神か	
(9) 英雄・主人公	
(10) 生	
(11) 明かな部分	
(12) 明かに書くこと: Stendhal	
(13) 暗い部分	
(14) 暗い部分を描く方法	
(15) 分析的方法	
(16) 心理小説	
(17) 内部描写	
福永武彦と二十世紀小説——初期講義ノートを中心に——	303
解 題	319

I

二十世纪小说论

张其成

北京出版社

一
ア
ン
ド
レ
・
ジ
イ
ド
序
論

〔一九五三—一九五四年度〕

1 一九一三年

le 5 juin 1953

しばしば近代文学(la littérature moderne)という言葉が現代文学(la littérature contemporaine)という言葉と共に、時期的に曖昧に使用されるように、二十世紀文学(la littérature du XX^e siècle)なる言葉も、文学的な意味で二十世紀がどこに始まるかを明かにしなければ、不確かな印象を与える。一つには十七・十八・十九世紀に於ては、既に確実に、それらの時代の文学的特徴が浮び上るのに対して、二十世紀は僕等がその渦中にいる時代であり、客観的に捕えるためには、あまりに身近く、親しく、惑わされやすい。その文学的形相は複雑な発展を持ち、十九世紀の静的(statique)なのに較べて動的(dynamique)であり、僕等は立ち止ってこれを眺めるのではなく、共に動きつつ眺めねばならぬ。そして結論として、僕等はこの新しい時代の文学が一九一三年に始まることを証明し、かつそれが如何にして新しく、十九世紀文学と如何なる点で隔絶するものであるかを、以下に証明したい。

十九世紀文学の主流は romantisme 浪漫主義と réalisme 写実主義とであり(更に極言すれば、レアリズムを以て覆われるだろうが)それは後半期に symbolisme 象徴主義と naturalisme 自然主

義とに変貌した。即ちロマンティスムはサンボリスムに、レアリスムはナチュラリスムにそれぞれ進化(évoluer)した。進化という言葉には、ブリュヌチエルに俟つまでもなく、頽唐(décadence)の場合も含まれるが、十九世紀の終りには、前者は bas-symbolisme 晩期サンボリスムとなつて、多くの群小詩人を輩出し、小文藝雑誌とカフェとの中に詩の方向を見喪い、後者は bas-naturalisme 晩期ナチュラリスムより通俗小説の氾濫となつて、小説を普及はしたが、最早ユゴー、スタンダール、バルザック、フロベールなどの持っていた壮大と香気とを喪うに至つた。モーパッサンの死んだのは一八九三年であり、ゾラの死んだのは一九〇二年である。そして巨匠なき時代(二十世紀初頭)に最も流行した小説家として、例えばオクタヴ・ミルボー(一八四八一—一九一七年)を挙げることが出来る。即ち次のような作品⁽¹⁾

『責苦の庭』 *Le Jardin des supplices*, 1898

『小間使の日記』 *Le Journal d'une femme de chambre*, 1900

『神経衰弱患者の二十一日』 *Les vingt et un jours d'un neurasthénique*, 1907

『車輛ナンバー 628 E 8』 *La 628 E 8*, 1907

『キジる』 *Dingo*, 1912

またアンリ・ド・レニエ(一八六四—一九三六年)はすぐれた詩人であるが、この時期には通俗的な成功を博した抒情的で sensuel な小説を濫作している。例えば、

『二重の情婦』 *La Double maîtresse*, 1900

『娛しむ』 *Le Bon plaisir*, 1902

『ある若者の休暇』 *Les Vacances d'un jeune homme sage*, 1903

『深夜の結婚』 *Le Mariage de minuit*, 1903

『ド・ブレオ氏のめづり合』 *Les Rencontres de M. de Bréol*, 1904

『生きてゐる過去』 *Le Passé vivant*, 1905

『愛への怖れ』 *La Peur de l'amour*, 1907

『燃え上がる青春』 *La Flambee*, 1909

『有翼蛇』 *L'Amphisbène*, 1912

(1) 戯曲に代表作『仕事は仕事』 *Les Affaires sont les affaires*, 1903

(2) 詩集に『夢の如く』 *Tel qu'en songe*, 1892: 『粘土の牌』 *Les Médailles d'argile*, 1900: 『水の都』 *La Cité des eaux*, 1902

この他に多くの群小作家がいるが、多少とも個性的な上の二人を挙げれば足りよう。従って、新しい作家の新しい作品は、今世紀の初頭に於ては、散発的に現れて来ただけで、容易に決定打を持つことが出来なかった。作品は必ずしもなかったわけではなく、ヴァレリイやジイドはいち早く仕事を始めていたのであるが。

ヴァレリイ『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法叙説』*Introduction à la Méthode de Léonard*

de Vinci, 1894『テスト氏との一夜』*La Soirée avec M. Teste*, 1896

ジャム『暁の鐘から夕べの鐘まで』*De l'Angelus de l'aube à l'Angelus du soir*, 1897

ジイド『地の糧』*Les Nourritures terrestres*, 1897

フリップ『ビュビュ・ド・モンパルナス』*Bubu de Montparnasse*, 1901

ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』*Jean-Christophe*, 1904-12

ジイド『狭き門』*La Porte étroite*, 1909

クロードル『マリアへのお告げ』*L'Annonce faite à Marie*, 1912

さて僕等が一九〇〇年以後のフランス文学の年表を見て来た時に、最もびっくりするのは、一九一三年に於ける偶然的な多産である。小説についてまず見よう。この年には、特に次の四つの作品がめじろ押しに並んでいる。

ブルースト『スワン家の方へ』*Du Côté de chez Swann*

アラン・フルニエ『モースの大将』*Le Grand Meaulnes*

ラルボー『A・O・バルナブース』*A. O. Barnabooth*

マルタン・デュ・ガール『ジャン・バロワ』*Jean Barois*

更に翌一九一四年に現れたジイド『法王庁の抜穴』*Les Caves du Vatican*がこれらに比して遜

色のない最も新しい作品であった。

ここに一寸「エヌ エル エフ」

「*La Nouvelle Revue Française*」(Gallimard社)について見て

みよう。「エヌ エル エフ」はその雑誌及び出版活動によって二十世紀文学を縦に鋭い線で貫いている。「エヌ エル エフ」の創立過程は別に詳述するとして、この雑誌はジイドを中心に、有能な文学者が集まり、一九〇八年創刊、これは一号で潰れたが、翌一九〇九年二月から再発し、一九一一年には少壮気鋭のジャック・リヴィエールが編輯長となり、また同年ガリマールの出資により出版部も設けられた。一九一三年には、既に活発に、順調に、発展していて、これはジイド生涯中の最大の失敗であるが、ブルーストの上記の原稿を拒絶したのも、この一九一三年である。(ブルーストはグラッセ書店から自費出版した。翌年ジイドは、書簡を寄せてブルーストに陳謝し、「エヌ エル エフ」は一九一七年に版權をグラッセから譲り受けて、再版した)。尚、上の五冊の書物のうちラルボー、マルタン・デュ・ガール、ジイドのはいずれも「エヌ エル エフ」の出版であり、ブルーストもまた、「エヌ エル エフ」の作家に加えられるに至ったことを注意しよう。

le 19 juin

次に詩の方を見ると、一九一三年はアポリネールの『*Alcools*』の出版された年である。

詩に於ては、小説に先んじて新風が行われ始めていた。ロマン、デュアメル、ヴィルドラック